

精選国語総合 現代文教材の内容

一 随想

● ぐうぜん、うたがう、読書のススメ(川上未映子) 読書論

本とはどのようにして出会ったのか。本はどうやって選べばよいのか。本を読むと何が起こるのか。それらの答えは、結局は本を読むことでしか得られない。それならば、偶然手に取った本から読み始めるのも一つの方法ではないか。国語の教科書を読むことから始まった自らの原体験をもとに語る、読書のすすめ。

● 「待つ」と「待つこと」(鷲田清一) 社会論

さまざまな道具の発達は「待たなくてよい社会」をもたらした。しかし、それは「待つことができな社会」への入口であり、「待たない社会」から「待てない社会」へと続く階段でもあった。かつて「ありふれたこと」だった「待つ」ことが、今では「法外に難しく」なりつつあることの理由と意味とを問いかける。

二 小説 (一)

● 羅生門(芥川龍之介)

『今昔物語集』に収められた「羅城門登上層見死人盗人語第十八」の逸話を想を得て、平安時代の荒廃した都を舞台に、生きるために自らの悪行を正当化しようとする老婆と下人の姿をおおして、人の心のありようを描く。近代短編小説を代表する作品。

● 青が消える(村上春樹)

一九九九年の大晦日の夜、世界から青い色が消えた。「僕」は友人に電話を掛け、町中を歩いて青が消えた理由を尋ねてまわるが、答えは得られない。そればかりか「誰も消えた青のことなんか気にしてはいなかった」。愛するものの喪失と、他者と思いを分かち合えない不条理とが生み出す、とまどいや哀しみを表す物語。

三 評論 (一)

● 水の東西(山崎正和) 比較文化論

鹿おどしと噴水から連想される西洋と日本との文化の違いを、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」といったキーワードを用いながら、二項対立の形式でわかりやすく説明する。

● 言語は色眼鏡である(野元菊雄) 言語論

雪や牛肉の種類から虹の色の数まで、世界をどのように表すかは言語によって異なる。つまり、人は言語という「色眼鏡」を通して世界を見ているのだ。それぞれの言語には固有の論理があるが、そこに上下の区別があるわけではない。言語の違いを例に、文化の多様性の認識と異文化理解へとつながる道筋を提示する。

● 森に起きていること(佐藤洋一郎) 自然論

私たちは「ともすれば人間と自然とを機械的に対峙させて」「森や山が「荒れる」ことを嘆き、美しい自然の保護を口にする。だが、多くの人が自然だと見なしているものが、実は人が手を入れることで護られた「自然」であることも少なくない。「人は自然の一構成者にすぎない」という観点から、自然とのつきあい方を探る。

四 詩

● 旅上(萩原朔太郎)

「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し……」初夏の風の中、遠い異国の地への憧れをみずみずしく描いた、朔太郎の詩壇デビュー作。

● サークラス(中原中也)

オノマトペ、七五調、リフレイン、巧みな比喩……さまざまな詩的技術を駆使して描くサーカスの情景に、自らの不安定な姿を忍び込ませる、中原中也の代表的な作品。

● I was born(吉野弘)

英語の受身形から、生まれることが受身であることに気づいた少年が、父との会話の中から生死の悲しみを受けとめていく過程を描く散文詩。

● 崖(石垣りん)

第二次世界大戦末期、サイパン島で追いつめられ崖から飛びこまなければならなかった彼女たちの悲劇は、未だ終わっていないことを告発する。

五 小説 (二)

● 清兵衛と瓢箪(志賀直哉)

瓢箪集めに熱中する少年清兵衛は、ある日「震いつきたいほどにいい」瓢箪を手に入れ、学校にまで持って行く。しかし、兄とがめた教員がそれを取りあげ「家庭で取り縮まっていたくよう」通告すると、以前から清兵衛の趣味を快く思わない父親は瓢箪を全て割ってしまう。個人の趣味と周囲の無理解とをユーモラスに描く小編。

● みどりのゆび(吉本ばなな)

末期の癌で入院した大好きな祖母のお見舞いに通う「私」は、ある夕方、意識がとぎれがちになっていた祖母の口から霊感めいた言葉を聞く。はじめは「ぞうっとした」その言葉が、ある行動の実行と、生き方を変える決断とを「私」に促してゆく。「みどりのゆび」をおおして、生と死、家族のつながりと個人の成長を紡ぐ物語。

六 評論 (二)

● 情報と身体(吉岡洋) 情報論

情報ネットワークが発達し、「空間的距離や時間的遅れはどんどん縮小されていく現代。その一方で、身体を移動させる機会は減少し、かえって人は「ますます狭い世界の中に安住するようになって」いないか。技術の発達による恩恵は享

受しながらも、同時に「人間が常に身体を伴った存在であること」の再確認の必要性を説く。

●「もの」の科学から「こと」の科学へ(池田清彦) **科学論**

二十世紀が『もの』の科学の時代だったとすれば、二十一世紀は『こと』の科学の時代になるはずだ。厳密性と普遍性を追求する『もの』の科学に対して、『こと』の科学には個別性と多様性への目配りが必要となる。あらゆる要素が絡み合い複雑化する現代社会において、求められるものの見方・考え方を提起する。

●コインは円形か(佐藤信夫) **認識論**

コインが「円形」なのは一つの視点から見た場合であって、それがコインの全容ではない。価値が多様化し異文化圏との交流が日常的な時代においては「自分の視点と自分の言葉遣いだけ」を信じてことなく「認識的な思いやり」をもつことが求められる。身近な事例を例に、物事を多角的な視点から捉える意味と意義とを論じる。

七 短歌・俳句

●その子二十一——短歌十六首

与謝野晶子・斎藤茂吉・北原白秋・石川啄木・近藤芳美・寺山修司・佐佐木幸綱・河野裕子の短歌を二首ずつ収録。
また、「今日の短歌」として、小野茂樹・俵万智・渡辺松男・穂村弘・東直子の作品を採録。

●いくたびも——俳句十六句

正岡子規・高浜虚子・種田山頭火・橋本多佳子・西東三鬼・中村草田男・山口誓子・細見綾子の作品を二句ずつ採録。また、「今日の俳句」として、坪内稔典・長谷川権・小澤實・夏石番矢・黛まどかの作品を採録。

八 小説 (三)

●なめとこ山の熊(宮沢賢治)

なめとこ山で熊撃ちをして生きる淵沢小十郎は、殺した熊にも礼儀をつくし、「熊のことば」だつてわかるような気がするほどの男だった。熊たちも彼を好いていて、彼の家の前まで来てから死ぬものまでいた。そんな小十郎が、冬のある日に向かった山で遭遇したできごととは。東北の厳しい自然

に生きる、人と動物の交流譚。

●空缶(林京子)

昭和二十年八月九日に、長崎で被爆した五人の女生徒。それから三十年がたち、翌年で廃校になる母校に集った彼女たちは、それぞれの事情を抱えながら大人になっていた。語り合う中で浮かびあがり交錯する、少女の頃の日々と被爆、そして今なお苦しむ後遺症。作者の実体験と思いがこめられた自伝的小説。

九 評論 (三)

●なぜ私たちは労働するのか(内田樹) **労働論**

「やりがいのある仕事」を求め、「自己実現」や「適正な評価」や「クリエイティブ」を夢見て、離職・転職を繰り返す若者は数多い。だがそれは、受験勉強とアルバイトが涵養した、本質の欠如した労働観の産物にすぎない。個人の努力と集団の利益との関係を手がかりに、働くことの意味と理由を喝破する。

●命は誰のものなのか(柳澤桂子) **生命論**

医療技術の発達には生きる機会を広げる一方で、「死ぬ権利」が問題となる事態を招いている。終末期医療をめぐる「日本では、治療の存続を患者自らが決めるもの」という考え方が大きくなりつつあるようだ」が、それでよいのだろうか。「正しい答えのない複雑な課題に対して、さまざまな意見に耳を傾けることを提言する。

●創造力のゆくえ(加藤周一) **芸術論**

創造するというのは「古いものを忘れて新しいものをその代わりに受け入れる」のではなく「古いものを受け入れて新しいものをそこに付け足す」ことだ。そのためには、古いものを全て学びつくすことと、仕事に「人格の全体を投じ」ることが必要だ。徳川時代の芸術に範をとり、日本の創造力が向かうべき道筋を示す。